

編集後記

本号はいつものように原著論文6編、症例報告9編以外に、特集として、第52回本学会総会のシンポジウム「長期予後とQOLからみた肝細胞癌の治療，浸潤性膵管癌の治療」における発表内容のまとめの論文18編が掲載されています。

さて以前，この編集後記に論文の質の善し悪しを判断する目安として緒言 (background) のことを取り上げましたが，このことについてもう少し述べてみたいと思います。ある論文を読もうと思う場合，まずその選択に大事なのが論文の題名です。次に実際にその論文を読むか否かの判断は，その内容が読む価値のあるものかどうかの判断によります。その判断の根拠として最も重用なことは，結果のみならずその研究がどのようなことを背景にし，何を目的に行われたのかということであり，そのために緒言 (background) を読むこととなります。ところが，本誌を含めて和文論文のかなりのもがこの点をきちんと書いておりません。わずか数行ですぐに対象と方法，そして結果へと移り，考察のところで関連する文献の引用をしながら長々と研究の背景を述べ，その後結果についての考察をする，というものです。実に読みづらいつつ同時に，読んでも価値の少ない論文のことが多いと思います。これに対して，英文論文ではこの点が明確に異なり，緒言 (background) で文献を引用しながら研究の背景と目的がきちんと書かれています。

そこで，緒言 (background) の中に研究の背景を述べる目的で引用した文献の数がいくつあるかをひとつの目安として，手近にあったいくつかの英文誌各1～5冊分と本誌1年分における原著論文について検討してみました。その結果，平均の引用文献数はJNCI 18.9(5～30)，Gastroenterology 16.5(3～40)，Ann Surg 12.7(3～36)，Br J Surg 9.0(1～25)，Am J Surg 7.1(0～15)，本誌 5.2(0～17，51編中30編は5以下)であり，偶然というか当然というか，インパクトファクターの高い順に並びました。

勿論この結果には，日本語と英語との文化的な相違を含めて様々な要因が関与していると考えられますが，やはり科学的な論文を書くという意味では英文論文の方が優れているように思います。そして，このような形で書く習慣を身につけることにより論文の質も向上し，学会誌の内容の充実，発展，さらには日本の研究が海外でも認められることにもつながるのではないかと考えています。(上西紀夫)